

「北朝鮮のリアリティー—良心が疼く—」

第3次朝鮮民主主義人民共和国(以下 共和国)訪問報告 2017年10月2日～7日

エラスムス平和研究所

所長 岩村義雄

主題聖句: 使徒 24:16 こういうわけで私は、神に対しても人に対しても、責められることのない良心を絶えず保つように努めています。

<序>

関西空港から直接、平壤に入れば、約2時間だが、国交がないため、北京にある共和国大使館でヴィザを取得します。パスポートには共和国を訪問した形跡は何も残りません。本人の写真をはった日本のパスポートより小さい一枚の査証が共和国の出入国の際、必要です。日本に持って帰ることができないので、写真に撮りました。同行された在日コリアンの李 昌一<ルビ ジョンイル>さんは日本で生活している二世です。朝鮮総連[在日本朝鮮人総連合会]のメンバーです。家族は韓国の済州島出身です。日本の在日朝鮮人の多くは済州島にルーツがあります。なぜなら戦後、李承晩[イ・スンマン 1875-1965]大統領の圧政、抑圧、ジェノサイド[集団殺害]を体験したからです。命からがら日本移住してきた経緯があります。日本でも結婚、就職、教育などで差別され、不利、不遇、人権がないがしろにされる時代が続きました。成績が優秀であっても国立大学の受験資格がなかったり、通学定期券なども発行されませんでした。日本人からはヘイトスピーチ(憎悪発言 hate speech)をずっと受けて育ったのでした。そんな試練の時に、共和国の金日成主席は日本の在日朝鮮人に惜しみなく支援しました。生きることもおぼつかない在日朝鮮人は歓喜し、国籍を韓国や日本ではなく、共和国にしたのです。つまり日本在住のほとんどの朝鮮人は共和国にルーツをもたないという歴史のアイロニーがあります。

李さんも日本に生まれ、育っていますし、税金など義務を果たしています。しかし、権利は認められていません。日本に共和国の大使館がないため、パスポートは発給されません。その代わり、日本政府は「再入国許可書」を発給します。出国した在日外国人が日本へ帰国する時に提示するパスポートのようなものです。海外に出ることができます。

多民族・多文化共生の流れと逆行する日本は、一番敵視している国の民間人へ和解をもたらし、友好を深める者がいなければ、日本こそグローバルな時代に孤立してしまうでしょう。

(1) 共和国とは

a. 共和国訪問の目的と日程、および参加者

一番目に、ボランティア活動の対象である孤児、夫をなくした独身女性、高齢の独居者の実態を知ること。

二番目に、同じアジア人として、友好関係を築く。

三番目に、戦時下の謝罪と補償を、一切していない共和国に対する、日本人としての自覚をもって訪問。

日程 2017年10月2日(月)～7日(土)の約一週間です。

参加者 日朝友好兵庫県民の会 宮本博美、川端 勝、岩村義雄、田中ひろみ、太田英昭、李

昌一の6名です。団長は元県会議員の宮本博美氏です。

3度目の訪朝です。現に見聞きした事実を語っても日本人は思い込みが激しく、聞き入れられません。“飢餓状態で民は苦しんでいる”、“いいところしか外国人に見せない”、“平壤だけが発達している”などを日本人は本気で思い込んでいます。帰国後、日本人の先入観を否定するやいなや、洗脳されて帰ってきた、共産党だ、だまされている、という反応に会います。共和国は、ヨーロッパ、アフリカ諸国からの多くの旅行者が行き来しています。トランプ政権を目の敵にした戦時下の緊張感はなく、平穏な暮らしぶりについて日本人にいくら説明してもわかろうとしません。どちらがマインドコントロールされているのでしょうか。訪朝の報告を話しても、第二次世界大戦前の日本のかたくなな態度と同じようだと、共和国訪問者は感じるにちがいません。第二次世界大戦時に日本人は「鬼畜米英」とすりこまれ、冷静でなくなった沸騰主義の再来です。

宮本博美団長は温泉学会で活躍なさっている関係で、金剛山麓の温泉にも立ち寄る機会がありましたことを感謝しています。金剛山はクムガンサンと言われています。最高峰の昆盧峰(1639メートル)をはじめ、南北60km、東西40kmにも及び、とがった山々1万1167もの峰からなるダイナミックな溪谷地帯です。朝鮮民族にとっては単なる景勝地にとどまらず、民族の象徴ともいべき存在となってきました。中朝国境の白頭山(中国側の呼称は長白山)と並び、共和国を代表する名山です。軍事境界線(北緯38度線)近くの江原道の東海岸に位置しています。意外にも、金剛山は、日本にもゆかりが深く、第1次昭和切手[1937年～1941年]として1939年に発行された7銭切手は金剛山がデザインにされています。また、世界遺産である京都市竜安寺の襖絵(1950年代梶月鶴翁 さつきかくおう制作)も金剛山が描かれています。5つの部屋のうち、4間が全部金剛山の絵です。その数は60余枚になります。共和国の金剛山は名山として知られ、日本の文化人の中で人気があったことに由来しています。

b. 北京空港

関空から北京に向かいます。一泊した北京で共和国のヴィザを取得。北京空港で高麗航空に乗る福岡県の訪朝団29名と出会いました。日朝の国交正常化を目指す福岡県日朝友好協会(会長・北原守元福岡県議)を中心とする代表団が偶然にも同じ期間、共和国を訪問しました。日朝友好兵庫県民の会はだいたい隔年ごとですが、福岡の協会は、私たちと同じ時期の2008年から発足し、毎年訪朝しています。10年目と記念して、他県、長崎、鹿児島などからも加わって、「九州地区日朝友好親善訪問団」で参加されていました。九州朝日放送の永吉真実記者たちや、西日本新聞記者なども同乗していました。

《動画参照》

<http://www.kbc.co.jp/movie/index.html?id=5956>

<http://www.kbc.co.jp/movie/index.html?id=5957>

帰国後の女性記者の放映は、ヴィジュアルな媒介がもつ威力を発揮しました。文字によって伝達したい現地の臨場感や、空気、一般的な風潮、エトスの紹介に、ある意味で羨望の思いを抱きました。「朝鮮」という国について、朝日が鮮やかな国の印象を日本人に報告するために

映像のパワーがまざまざと示され、圧倒されました。

飛行機の中で隣の席に座ったメディアの人も、北朝鮮に行くというと、家族や同僚から、いろいろと言われたと、入国前の緊張、不安を率直に語っておられました。楽しみとか、わくわくするという日本人は訪朝の経験のある人たちだけに共通しています。

共和国では、宗教に対しては、決して奨励されていません。自然科学が尊ばれ、いわゆる神崇拝に代わる対象です。ですから、宗教心が篤い東南アジアと比較して、民衆の崇拝行為はほとんど見かけません。しかし、自然科学は幼い時から教育されています。論理的思考は徹底しています。2005年に完成した「科学技術殿堂」を訪問させていただきました。子ども達が幼い時から興味深く科学技術を学ぶための工夫がなされています。

c. 平壤空港

飛行機内では必ず、ハンバーガーが出てきます。

平壤空港は2008年、2012年に訪問した時より、ずっと近代的になっていました。朝鮮対外文化連絡協会(以下 対文協)の李河進研究員、呉星宇局員が出迎えに来ていました。一行は3年ぶりの再会です。

車で30分もすると、市街地です。年々、変化する中国と同様、めざましい近代化に息を呑みまします。ちょうど一ヶ月前の中国南京訪問(9月8日～12日)でも、目を見はる超高層ビル、近代的な道路、地下鉄などの発達ぶりに圧倒された時の印象と良く似ています。経済学でいう「後発性の利益」でしょう。ベトナム、インド、シンガポールなどの経済発展は著しいものがあります。発展途上国とはもはや形容できません。中継トランジットで立ち寄るだけにすぎないにもかかわらず、市街地に入ると、中国の街並みは日本、欧米諸国にとって垂涎のものです。後発性の利益をうまく享受し、共和国も韓国、中国、日本を抜かんとするばかりの意気込みが国中に満ちています。

日本では、脱北者たちのドキュメンタリーや、拉致、テポドン、核実験などの報道により、共和国に対するイメージは「悪」ただそれだけの一色です。共和国について良い発言をしようものなら、ひんしゆくをかいます。「共和国」ツアーを願っても、「JTB」をはじめ一般の旅行会社は募集していません。「共和国の歩き方」「るるぶ北朝鮮」などの旅行雑誌も見たことがありません。一般の日本人には情報が入りません。共和国訪問について日本人の反応は画一的です。「拉致され、もう帰ってこられない、自由のない国だから」「平壤のいいところしか見せられない。地方の飢餓、貧困、抑圧は隠されている」「独裁国家金正恩(キム・ジョンウン)は強制収容所に送り込むぞ」など厳しい反応があります。核実験や弾道ミサイル発射を繰り返す北朝鮮 北朝鮮＝悪玉、イスラーム教＝テロ、中国＝覇権主義など報道を通じて流れるネガティブなイメージが注入されています。

民間レベルで隣国の人々との対話をしなければ、憎悪し合う関係にピリオドを打てそうにありません。

(2) 遠い隣国

a. 最貧国ネパールから共和国へ

一週間前9月28日、ネパール国ダルマスタディにできた孤児施設の開所式に出席しました。その前日、5月に完成したマナハリ・チルドレン・ホームに向かいました。乗車したインド製のジープで片道約6時間かかりました。有料道路にもかかわらず、悪路です。運転するプスフォンスさん(22

歳)は、ダリット Dalit 不可触民(ヒンドゥー社会の中でも最下層階級「触れると穢れる人間」)のひとりでした。猛暑ですが、クーラーをつけずに走ります。会社から節約するように言われているからでしょう。アスファルト舗装されていたとは思えないほど、完全に路面はでこぼこの穴だらけの道です。おかまいなしに高速で走ると道路から谷底に転げ落ちてしまいます。くぼみが多く、その度に、フットブレーキを用いて、低速走行せざるを得ません。それでも乗車している者に与える衝撃は大きいです。ストリート・チルドレンはいないものの地方の通りに行くと、貧しい身なりの子どもが目立ちます。

ネパール訪問を終えて 3 日後に、北京で走った通りは天国のようになめらかでした。続いて共和国に入国しても、北京と変わらない道路事情に、貧しさは微塵も感じられませんでした。ネパールから共和国に入るとまるで別世界のようです。経済成長、科学技術の進歩、後発組の優位性が目立ちます。

共和国には、遅れまいとする誇り、努力、後発の有利さが影響を与えているように思えました。ネパール人も勤勉、エネルギー、暗算が速いことなど決して愚鈍な印象はありませんでした。共和国も家族主義であり、親や先祖を大切にすることも共通しています。

経済封鎖でオイルなどが無いにもかかわらず、平壤市内には車の多さにも驚きました。タクシーは役人や、海外からの旅行者だけが利用しているわけではありません。一般の人々もタクシーを利用しています。地下鉄にしても乗り物は 5 元(ウォン)と決まっており、どんな遠方まででも 5 元(ウォン)です。1 円=約 7.6 北朝鮮元ですから、1 円以下ということになります。同じ金額のロータリーバス、地下鉄、二階建てバスなど庶民の足になっています。2008 年の時は、信号はなく、名物の女性警官の交通整理の立ち振る舞いが外国人に人気がありました。美人であるばかりか、美しい指示を出すからです。今回は LED の信号が十字路など、各所にありました。

幼稚園前の保育園から大学までの教育費、医療費も共和国では無料であることは、日本人は意外と知りません。

ネパールなどどこが違うのかは、政治力と思わされます。強烈な指導力を発揮して、民に働きかける構造がネパールには不足しています。政治権力者に選ばれた途端、目標を達成し、安堵してしまうかのようです。むしろ選挙で信任を受ければ、そこからスタートラインに立って、治水、福祉、繁栄のために人力を尽くすべきです。上に立つ者の慄然とした思想、自己犠牲的な野望、人民を服従させる政策がネパールにはありません。

一方、中国、共和国は、人民を束ねる強固な精神力が前面に出ます。

b. 強力な指導力

米国の政治的力、軍事的力、経済制裁による国際的圧力の中で、自強力を発揮して理想国家を建設し完成する精神。たとえば、電力問題を自力で解決。水力発電所で生産することによって生活水準があがったと、李河進研究員は筆者に言いました。

昨年 5 月、朝鮮労働党第 7 回大会に決議された課題の中で一番重要視しているのは、全社会を金正恩化することだそうです。主体思想をベースにして、社会のすべてをもって発展させようとするために、朝鮮労働党を中心に、人民政治思想革命、技術革命、文化革命の三大革命を実施し、科学技術の強化、国のすべての先端技術を世界水準に発展させる。経済、国防、文化を急速に発展させる。科学技術 5 カ年計画の中の技術を発展させよう、すべての経済生産を高めよう、経

済強国を建設すると鼻息は荒いです。石炭、金属、機械、国道管理についても人民経済5カ年計画の範疇です。文明強国とは社会主義文化が開花することであり、民が高い想像力と文化水準をもって、最高の文化を構築していく意気込みは、あらゆる職業の人たちから耳にすることができました。

日本人は共和国が独裁政治のため、言論の自由は制限されているという先入観があります。幼い時からそのように教えられています。反米教育が徹底していることは、保育園、幼稚園や学校の壁に飾られている絵、作品などから察せられます。さしずめ、それは、日本が、戦前、欧米諸国を鬼畜米英と敵視していたのと同根です。

朝鮮の歴史を知らない日本人は、今すぐにでも共和国がテポドンなどで、攻撃してくるかのような誤解があります。Jアラートなどについて、日本のメディアもヒステリックな反応をします。日本の為政者が報道を用いて煽る影響です。朝鮮は大国から常に侵略されてきた悲劇の歴史はありますが、他国に攻め入ることはなかったから自分たちから日本に攻め入るようなことはあり得ませんと共和国の人たちはよく主張していました。軍事パレードや、女性アナウンサーが読みあげる朝鮮中央放送の強い調子のニュースが日本人には恐怖感を与えていることも事実です。しかし、米韓演習など、むしろ共和国に挑発行為をしている報道は、正当であるかのような印象が日本人全般にすり込まれているのは奇怪です。まさに日本人の思考停止、精神的な心筋梗塞、クリティック[批判]欠如の表れです。

どんなに専横な封建制度、ファシズム、独裁国家であっても、例外はあります。余談ではありますが、共和国には「朝鮮人民軍」、「人民保安部(警察)」、「国家安全保衛部(秘密警察)」の三つの治安機関があります。禁酒法の厳しかったアメリカでもアル・カポネ[1899-1947]など違法の人たちがいました。同じように統制が厳しいと言われる共和国でも秘密結社組織「朝鮮幫(パン＝マフィア)」が跋扈すると耳にしました。

古今東西、人間の愚かさはどんなに理想を追い求めても、どこかにすき間が生じると言えるかもしれせん。

c. 農業の実態

神戸国際支縁機構は、国内、アジア、オセアニアなどの被災地に復興のために赴きます。たいした働きはできていません。しかし、過疎、高齢化、少子化の影響で、地方の若者が都会に移住してしまう問題があります。2011年の東日本大震災の後、「田・山・湾の復活」を目標に地域の活性化のお手伝いをしています。農・林・漁、沿道整備、傾聴ボランティアに取り組んでいます。地方であっても若者にとって魅力のあることに気づいてもらえるように東北へ毎月のように通っています。日本は森林が7割です。共和国と似ています。日本は穀類の自給自足に失敗しているといっても言い過ぎではありません。輸入に依存せざるを得なくなっています。2017年7月5日、九州北部豪雨があり、福岡県朝倉市杷木(はき)松末(ますえ)の270戸は壊滅的な被害を受けました。そこは幾世紀にもわたり、日本の原風景のひとつと言われている棚田(たなだ)や段々畑で、農業を営んできました。また、林業も生活の手段でした。しかし、自然災害によってまったく生計がなりたたなくなりました。日本一の志波柿も損なわれました。機構は東北ボランティアにおける農業、林業、漁業の支縁活動により身につけた方法で、訪問活動から始めました。共和国の平壤近くの山にははげ山が多いと海外からの旅行者は気づきます。山が多いために、「木を伐採して、耕地にするわ

けではなく、オンドルの燃料に化けてしまった」と2008年、はじめて訪朝した際、故友井公一(社[やしろ]町議会議員)氏は語りました。ネパールと同じように、共和国でもデントコーンの畑をよく見かけました。トウモロコシの葉っぱは水平に伸びますが、デントコーンは2メートル以上に伸びた茎からさらに上に伸びます。決して美味とは言えません。デントコーンのような一年草ではリン酸欠乏などをもたらしやすい、他の栽培には不向きな土壌になってしまいます。しかし、日本はデントコーンを輸入していますから、将来は日本に輸出するという方策もあります。

前回、2012年の共同農場を訪問した際、生産量を増やすために、化学肥料を用いている印象がありました。今回、違っていたのは、無農薬、有機やバイオマス、自然の循環に配慮するという農法が取り入れられていました。

稲刈りを9月18日、19日に宮城県石巻市渡波で行なった際、コンバインを用いず、鋸カマで稲刈りをしました。すぐに「稲架掛け」(はさかけ)をし、天日干しをしたのです。ちょうど稲刈りの時候に、共和国を訪問したので、高速道路から散見する稲刈りの様子を見て、手伝いたくなる衝動を抑えるのに苦労をしました。

呉星宇局員によると、「経済制裁のため、燃費は貴重なため、農機械をできるかぎり用いないで、昔ながらの稲刈りをせざるを得ません」と言われました。「それならば牛などを用いないのはどうしてですか」と聞き返すと、「地域の人民が協力し合って耕作をするので、牛の力にあまり頼らなくてもいいのです」と答が返ってきました。確かに、デスクワークをしている人も、大学教授であろうと、国家の中枢の人であろうと、人民保安院、人民軍も金曜日、土曜日は、稲刈りを手伝うのは一般的なようです。

(3) 貧困と孤児

a. マインドコントロール

日本人は、日本の茶の間で洪水のように流される共和国の民衆の飢餓、貧困、食糧不足が本当だと思い込んでいます。しかし、共和国に一步入ってだれしもが、自分の目を疑います。きっと騙されているにちがいない。これは巧みなトリックにちがいないと、見るモノ、聞くモノすべてを素直に受け入れられません。日本人には共和国の経済成長した実状を目の当たりにしてにわかに信じがたいカルチャーショックを受けます。『マインドコントロールの恐怖』(スティーブン・ハッサン 浅見定雄訳 恒友出版 1988年)は、マインドコントロールについて興味深い視点を与えてくれます。

『大辞林』(三省堂編修所 第三版 2006年)によると、「マインドコントロール(英: Mind control)とは、他人の思想や情報をコントロールし、個人が意思決定する際に、特定の結論へと誘導する技術を指す概念」と定義します。

日本人は「北朝鮮」というキーワードを聞くだけで、拒絶反応を示します。高所恐怖症に近い「フォビア」(恐怖症)があります。拉致、テポドン、核実験など、繰り返し、アメリカ合衆国や日本政府はメディアを用いて、危険視します。その結果、理論的な根拠がないにもかかわらず、社会的に北朝鮮憎悪のフォビアが浸透しています。

日本人は共和国こそ、人民を強要し、自由を奪い、むしろマインドコントロールしていると思い込んでいます。しかし、訪朝したことがある人々なら、日本人に抱かせているある種の心理的操作に覚醒されます。不幸なことに、日本に帰国して北朝鮮の真実を伝えても、「あなたは騙されている」とはねつけられる不愉快な体験を余儀なくされます。つまり日本人の思考停止によってもたらされ

ている無知ゆえの愚かさに辟易とします。真実に対する拒絶反応はある種の病的な症状です。本人は自覚していないことが病状の深刻さを物語っています。知性、健全な批判力、冷静な分析力が心筋梗塞です。

経済封鎖をすれば共和国は音を上げると考えるアメリカの政策に同調してはなりません。1953年7月27日、休戦が成立し、そのときの前線が南北間の事実上の国境として受入れられました。日本の高度経済成長に寄与した朝鮮戦争で、およそ130万人の韓国人（その多くは民間人）が死亡しました。多くの日本人が見逃していることがあります。北朝鮮人は50万人、アメリカ人は約5万4000人が死亡したのに対し、彭徳懐[ほう・とくかい 1898-1974]が率いる中国人の死者は100万人にも上るとのことです。どんなに諸外国が経済制裁に中国に圧力をかけて、経済封鎖をするように迫っても、あの戦争で多くの人民の血を流して守ろうとした国を簡単に中国が見棄てるわけはありません。そんな図式を見抜けず、制裁一本槍では、拉致問題、核実験、ICBMについて話し合いのテーブルについてもかみ合わないでしょう。

b. 日本の敵視政策

Jアラート(全国瞬時警報システム)の警報が鳴ります。日本全体が緊張し、日本の政権が強硬な意見を出しても正当であるかのように判断します。しかし、宮城県石巻市民のアンケートによると、ミサイル避難はわずか17パーセントにすぎません。62パーセントが訓練を必要とせずと一面記事にとりあげられていました。(『石巻日日新聞』[2017年10月3日付])。

一方、日本政府は、国民に大義名分とばかり軍備拡張の口実にしています。日本は経済の好転の兆しがみられません。しかし、日本の防衛費は増加し続けています。2017年度防衛費関連費用は前年度予算に比べ710億円増えて、5兆1251億円(約456億1000万ドル)です。5年連続の増加です。

「沖縄では毎日オスプレイが飛ぶたびにJアラートで警報すべきだ」というブラックジョークを数人から聞いた。確かに宇宙空間を通過する北朝鮮のミサイルより、数百メートルの頭上を飛ぶ事故多発機の方が現実的な脅威だ、『沖縄タイムス』(2017年10月30日付)、と述べています。

なによりも日朝関係の将来を考えると、ドイツとイスラエル関係を考えざるをえません。ドイツはユダヤ人に対して言語に絶する殺りくを戦時下行いました。ショアー(ユダヤ人虐殺)は600万人に及びました。その結果、ドイツとイスラエルの関係は敵対し、未来永劫にわたって回復する余地はなさそうに思えました。たとえば、イスラエルのパスポートには、長い間、「ドイツを除く全世界で有効」と印刷されていました。

しかし、ドイツが戦前、戦時下の謝罪と補償という手段で責任をとろうとしました。人間は過去に対する責任を正しく認めることによってのみ、未来をひらき、人間らしさを取り戻すことができます。口先だけでなく、行動に移すには、ドイツ政府は多くの費用をつぎ込んで、戦争資料館をベルリンはじめ主要都市に、ヤドヴァシエム(ホロコースト博物館)のような記念碑等もつくりました。戦争加害博物館の場所が大事なのではありません。記憶は多くの人々が繰り返し見たり、聞いたりすることによって戦争犯罪、惨禍を再び繰り返さないために大切です。記憶が有効であることを証明する姿勢が求められます。記憶のための行動はヒロシマ、ナガサキ、フクシマの被害の視座ではなく、加害への反省から「想起の文化」を創らねば日本はアジアの近隣諸国から信頼してもらえない国とし

て、生き残れなくなります。

日本人が朝鮮人に対して異常なほど差別感情をもってきたことは歴史が証明しています。嫌韓にしても、北朝鮮の政策に対しても日本人の嫌悪感が消えるには、より長い時間が必要です。

ですから、日朝友好兵庫県民の会をはじめとする各地の友好の会、キリスト教的精神に基づく和解への試みが必要です。主題聖句にありますように、「良心」に基づいた行動は、タコ(他己)の精神で表されるでしょう。金日成 Kim Il-sung [1912-1994] 主席の父金亨稷[キム・ヒョンジク 1894-1926]と母康盤石[カン・パンソク 1892-1932]はキリスト者であったからこそ、日本の抑圧、強権、無慈悲な政策に抗っていました。今回、金剛山で金亨稷の残した座右の銘「志遠」は志を遠大にもつことだ、との意味についてガイドは語りました。私たちの活動「支縁」と同じ発音であるゆえに親近感を持ちました。

今後、日本の若者による共和国の水害、干ばつ、冬の暖房のためのボランティア活動、共通の歴史認識のための教科書対話など、草の根的なアプローチが両者の関係を着実に修復していくことと信じます。

しかしドイツとイスラエルの関係のように、経済的・軍事的な関係が政治的な和解をもたらしたことは一考に値します。イスラエルに対する経済・軍事援助が最終的にはドイツ・イスラエル間の個人のレベルでの和解に導いたことを黙視できません。

c. 飢餓と貧困にあえぐ国

共和国といえば、餓死者が出るほど貧しいのに、軍事にばかりカネを使っているというイメージが日本では強いと思います。日本人は共和国の経済の表と裏を知りません。富裕層もいるということなど想像もできません。

元山から帰途、車窓に入る田園風景はのどかです。鋸カマを用いて、稲刈りの時節でした。私たちは9月18日、19日に宮城県石巻市渡波で長浜幼稚園の園児たちと稲刈りをしました。やはりコンバインなど機械を用いずにする江戸時代と同じ農法です。9月23日、24日には、園児たちと大正時代の脱穀機で脱穀をしました。同じ脱穀機をベトナムの水害のあったラン・チャン地区でも見かけました。足踏みをしながら、稲穂を取り除く作業です。10月5日、共和国では家族や近隣総出で稲刈りをしています。

日照りによる干ばつ被害、水害被害の地域に案内してくださいとお願いしました。なぜなら共和国訪問の目的のひとつは、孤児、夫をなくした独身女性、高齢の独居者たちへの寄り添うことだったからです。しかし、2年前の干ばつの際も、人民軍が生活能力のない村民への救済処置を迅速にとったため、半年以内に困窮者はいなくなってしまうと説明されます。だから、今、写真撮影できる場所がないとのこと。「日本から寄附を集めるためには、貧しい生活のリアリティーが必要です」と申しあげました。

確かに、車で走っている高速道路、車窓から見る光景、家屋、人々の服装は、アジアの最貧国であるネパールとは異なり、みすぼらしさはありません。

どんなに協同農場がバイオマス、太陽エネルギー、無農薬、有機で優れていても、孤児は必ずいるというのが各国を回っていて味わう体験です。たとえば、親が交通事故で失われるとか、父母が離婚するとか、病死などの理由により、孤児がぜんぜんいないというはあり得ないことです。2016年11月にベトナム国クアンビン省でも役人は「わが国には孤

児はいません」と言い切っておられましたが、水害の被災地訪問に同行してもらおうと、孤児があちらこちらにいることが判明したことがありました。「共和国でも孤児院が発達し、孤児はいないかどうか確信がおありでしょうか」と尋ねると、「はい、確かに平壤以外では孤児はいることを聞いています」と答えられました。日本からの支縁により、孤児の施設を建てるためなら、大歓迎しますと、対文協の孫哲秀(ソンチョルス)研究員たちは答えられました。

次回訪朝には、孤児の家建設と、孤児たちが大人になるまでの「カヨ子基金」により寄り添うことができるようにと、相互に固い握手をして別れました。

<結論>

日朝友好兵庫県民の会発足時から常任委員として活動させていただいています。隣国の実態を知らなければ、「知らぬが仏」と穏やかにしていただけるものの3度にわたる訪朝を通じて、あまりも日本国内の人々の認識がずれていることに黙ってられなくなります。

元山(ウオンサン)は共和国の中でも、日本人、帰国在日コリアンが多い地域です。レストランで提供される朝鮮料理に日本の醤油、みりん、味噌などが多く使われています。日本と共和国の連絡船として1992年から2006年まで行き来していた万景峰号が元山港に寄港していました。

ちなみに、元山で、自由行動の時、道行く人と親しくなりました。日本語が通じました。日本生まれ、日本育ちだからです。「日本人とひさしぶりに日本語で話ができうれしいです。自分の祖国は本当は日本ですが、妻も、子どももまわりはすべて朝鮮人です。ここで骨を埋めますが、祖国日本を思わない日はありません。夢でしかもう会えない父母が住んでいた日本。死に目にもあえませんでした。自分は地位もないですが、この国と日本を結ぶ何かができたらうれしいです」と胸の内を語ってくださいました。

遠い異国の地で日本について望郷の思いで語る人の心の内を聴いて、友好のためにもっと活動をしていこうと決意を促されました。

思想、宗教、国籍が異なっていたとしても、北東アジアの人々との壁はどうしてできたのでしょうか。敵対関係になってしまった原因は、何かと考えると、双方とも相手国をなじる結果になります。

真の友好を回復するには、相手が感情を害していれば、こちらから近づいて謝ることは人間関係、家庭、地域、否、国家間においても重要なことです。拉致、テポドン、核実験に対して、非難する前に、1910年以降、朝鮮半島において、土地を収奪し、強制連行、日本軍「慰安婦」問題、創氏改名、朝鮮語禁止、宮城遥拝などを日本は繰り返したことを考える必要があります。日韓条約のような韓国との間には、賠償などがありました。共和国には一銭も支払っていません。

和解にはまず、日本側からの謝罪をすべきなのは筋です。1910年以降の血の叫びを聞き取る良心が問われています。

- 拉致、テポドン、核実験に対を非難する前に、1910年以降、朝鮮半島において、土地を収奪、強制連行、日本軍「慰安婦」問題、創氏改名、朝鮮語禁止、宮城遥拝などを日本は繰り返しました。
- →拉致、テポドン、核実験に対を非難する前に、～日本は繰り返したことを考える必要があります。